



木に囲まれ落ち着いた居場所となった図書コーナー（小田原市立大窪小学校）

## CONTENTS

### 森のニュース

- 1 堂平地区における自然林の土壌保全対策の成果 ..... 1  
～水源環境保全・再生のためのシカ・植生・土壌の統合的な対策～
- 2 県央地域の広葉樹材有効活用の取組 ..... 3  
～広葉樹資源活用による持続的な森林保全を目指して～

### 森林環境譲与税 の取組

- 小田原市 「森のせんせい」 ..... 5  
～森・自然・子どもが大好きな57人の「せんせい」による木育の推進～

### わが市わが町

- 横須賀市 ～旧軍港都市の遺構整備と里山環境保全の取組を進める～ ..... 7

### 森林づくり活動 グループの広場

- はるひ野里山学校 ～川崎市黒川谷ツ公園の里山を保全する～ ..... 8

### 事務局便り

- ..... 10

# 森のニュース 1

## 堂平地区における自然林の土壌保全対策の成果

～水源環境保全・再生のためのシカ・植生・土壌の統合的な対策～

### 神奈川県自然環境保全センター自然再生企画課

#### 1 はじめに

東丹沢堂平地区は、相模川水系宮ヶ瀬湖上流に位置し、標高1000mを超す稜線一帯にはブナ等の自然林が分布し、丹沢大山国定公園の特別保護地区に指定されています(図1)。1980年代以降、堂平



図1 東丹沢堂平地区の位置

をはじめとした丹沢の高標高域を中心に、ブナの立ち枯れやオーバークースによる登山道の裸地化、高密度に生息するようになったニホンジカ(以下、シカ)の採食により、スズタケ等の林床植生が消失して裸地化が進行しました。裸地化すると雨水は土壌に浸透しにくくなり、地表流となって表層土壌を流出させます。実際に堂平地区の裸地化した自然林内では、2005年の1年間に、植生の全く無いハゲ山と同程度である厚さ1cmの表層土壌の侵食が観測されました。これは、森林の水源かん養機能発揮に重要な役割を担う土壌の貧弱化が進んでいることを意味します。さらに多量の土壌流出は、ダム堆砂の増加や水量不安定化を通じて県民生活に影響を及ぼすことが

危惧されるようになりました。

そこで、自然環境保全センターでは、2007年度から水源環境保全・再生施策の一環で丹沢の高標高自然林における土壌保全対策を進めてきました。ここでは、堂平地区の取組について対策手法の開発も含めて紹介します。

#### 2 堂平地区の自然林における土壌保全対策の考え方

土壌侵食を防止するには林床植生を回復させる必要があります。2005年当時の堂平地区では、植生回復を目的としたシカの捕獲や、シカの採食から林床植生や後継樹を保護するための植生保護柵の設置等がすでに行われていました(写真1)。



写真1 自然林内に設置された植生保護柵を設置して12年が経過し、柵内では顕著な植生の回復がみられる。(2019撮影)

しかし、植生の回復には時間がかかるため、既存の中長期的な自然再生対策に加えて、新たに短期的に土壌保全効果が得られる対策手法を開発し、統合的に対策を進めました。

土壌侵食量の観測結果から、堂平地区では、林床植生と落葉を合わせた地表面の被覆率が低いほど土壌侵

食量は大きくなることがわかりました。さらに、土壌侵食量には季節変化がみられ、同程度の降雨であっても、ブナ等の上層木の落葉が堆積した状態の秋の土壌侵食量のほうが、落葉堆積の流出した裸地状態の夏季の土壌侵食量よりも少なくなっていました。つまり、すでに林床植生の衰退してしまった箇所でも、落葉で地表が覆われていれば、短期的な土壌保全は期待できます。そこで、地表に簡易な工作物を設置することで、秋に堆積した落葉をその後の風雨で流出させることなく地表に保持する新たな土壌保全工を開発しました(写真2)。

自然林内の斜面一帯で土壌を保全するため、緩傾斜等の柵の設置が可能な箇所には従来の手法による植生保護柵の設置を進め、柵を設置できない急傾斜地や雨裂等の微地形に土壌保全工を配置しました。加えて、2012年度からは、登山道の裸地化に対応した木道や構造階段の設置を進めており、周辺の斜面と一体的に土壌保全を図っています。(写真3)。

#### 3 堂平地区における土壌保全対策の効果

2005～2006年度に堂平地区で試験的に土壌保全工を設置したところ、施工翌年の観測結果から、無施工地と比べて土壌侵食量が軽減されることがわかりました。この結果を踏まえて、堂平地区の複数の施工区において、2007年度から土壌保全



金網筋工では、施工後1～3年程度で20～30cm堆積する箇所が多い  
写真2 土壌保全工の設置状況（金網筋工の例）



左写真の手前は施工前 構造階段設置後3～4年たつと施工前よりも植生量が増加する  
写真3 踏圧による登山道の裸地化と構造階段の設置例

工を順次設置しました。土壌保全工の設置箇所では落葉の堆積による土壌保全や雨裂等の縮小といった効果が確認されています。

植生保護柵に関しては、堂平地区の稜線部を中心とした既存の植生保護柵の維持管理を継続するとともに、2007年度以降に新設した柵を含めて、堂平地区自然林内の植生保護柵総面積は約20haにのぼっています。植生保護柵のモニタリング結果から、柵内では、林床植生量の増加や木本類の増加に加え、シカの影響により絶滅が危惧された多年生草本の出現やスズタケの回復、後継樹の生育等が確認されました。このように、植生保護柵では林床植生の回復による土壌保全に加えて、希少種の保全や天然更新による森林再生の可能性も見えてきています。

さらに、継続的な捕獲により、シカの生息密度は捕獲開始前である2002年度の30頭/km<sup>2</sup>に比べて、

2014年度以降は概ね10頭/km<sup>2</sup>未満に減少しています。これに伴って、植生保護柵内の植生回復の水準とは差があるものの、柵外でも条件の悪くないところではシカの不嗜好性種を中心とした林床植生が増加してきています（写真4）。しかし、堂平地区でもあまり林床植生の増加がみられない箇所やシカの捕獲が困難な場所もあることから、今後も現地の状況を踏まえて、植生保護柵の維持・新設や土壌保全工の設置を行い、



シカの不嗜好性種であっても林床植生があることによって、地表に落葉が保持され、年間を通した土壌保全につながる

写真4 柵外の林床植生の変化（左：2007年5月18日 右：2019年9月4日）

統合的に対策を進める必要があります。

#### 4 水源地域である丹沢の自然再生に向けて

堂平地区は1990～2000年代にかけて、丹沢でも最も自然環境の劣化していた地区の一つでした。このため、ここで紹介したもの以外にも、多くの科学的調査や試行的事業が先行して行われてきました。現時点では、丹沢の自然再生という観点では道半ばですが、他地区と比べて対策は全般的に進捗しており、とくに短期的な土壌保全対策の効果は着実に得られています。

自然環境保全センターでは、これまでの堂平地区の長期的、統合的な取組で得られた知見を活かして、水源地域の多くを占める丹沢の自然再生に向けて引き続き取り組んでいきます。

（神奈川県自然環境保全センター自然再生企画課）



丹沢大山自然再生の  
取組みに関する情報



## 森のニュース2

# 県央地域の広葉樹材有効活用取組

～広葉樹資源活用による持続的な森林保全を目指して～

## 神奈川県県央地域県政総合センター森林保全課

### <はじめに>

神奈川県の森林面積のうち58%は広葉樹林です。県では、年間約3万㎡の木材を生産していますが、広葉樹材はそのうちのわずか1%未満です。

かつては人々の生活を支え、利用されながら育まれてきた里山の広葉樹林が、利用されずに大径化した結果、県央地域では、令和2年度にナラ枯れ被害が激増しました。被害木は、公園、小学校、民家裏の斜面緑地など、人々の生活に近接した場所にもあり、倒木の危険から早急に伐採することになりました。高齢化した里山広葉樹林の森林管理の在り方を、見直す時期がきていると思われます。



公道沿いのナラ枯れ被害木（綾瀬市）

### <広葉樹材利用促進事業>

伐採されたナラ枯れ被害木は大径材ばかりで、廃棄物として扱うには心が痛みました。ナラ枯れ被害木のほかにも、倒木の恐れがある大径木や街路樹、森林作業道の支障木な

ど、多くの広葉樹が伐採されていますが、通常は、林内にそのまま残置するか、高額な処分費用を払って廃棄物として処分されています。

その一方で、相模原市では、小学校の学習机を地元産広葉樹材の天板に交換する事業を実施しています。



広葉樹で製作した学習机の天板

広葉樹は堅いため、特別な加工処理を施さなくても、木の手触りを生かしたまま学習机に利用できます。しかしながら、広葉樹材の確保が難しく材料の不足が課題でした。また、近年の薪需要の高まりから、薪の生産販売を新たに手掛けることになった林業経営体では、針葉樹と比較してより高く販売できることから、広



新たに設置された薪無人販売所

葉樹材を希望しています。

そこで、当センターでは、これまで利用されなかった広葉樹材の有効利用を図っていくことにしました。具体的には、令和4年度より広葉樹材の搬出運搬、木製品や薪への加工に要する経費を支援する事業を実施することにしました。

これに伴い、林業とは関わりの薄かった公園・道路管理部局等からも伐採情報を収集し、搬出のできる林業経営体につなげる取組も実施することにしました。さらに、広葉樹材の受入先や受入条件をまとめたチラシを作成し、市町村や造園業者等に配布したほか、ホームページにも掲載しました。



補助事業により搬出された広葉樹

この結果、相模原市の広葉樹材の不足が解消したほか、厚木市でも中学校の図工室で使う机や椅子に広葉樹材を活用する事業が始まりました。各関係者からは、処分費用が抑えられるうえに、脱炭素社会の実現につながる良い取組であるとの意見をいただくことができました。広葉



ナラ枯れ材で製作した学習機の天板（相模原市）



図工室で使用する広葉樹の机と椅子  
（厚木市）

樹は廃棄物ではなく多くの使い道のある資源であると認識していただけたことが、一番大きな成果だと思います。

令和6年度からは、神奈川県全域で、広葉樹材の搬出を支援する事業が始まります。これをきっかけに、広葉樹を資源として活かす取組が増え、木材の持つ二酸化炭素固定機能を促進させると共に、広葉樹材の取引が活発になることで地域が活性化し、さらに広葉樹林の伐採更新が進むことで大径化による危険木やナラ枯れ被害の低減につながることを期待しています。

## <その他の取組>

### ○プラットフォームの活用

広葉樹は、全国的にも流通経路が確立されておらず、針葉樹以上に搬出コストが掛かるため、優良材であっても低価格な薪やチップになりがちです。多種多様な広葉樹のニッ

チな需要がどこかにあるはずですが、供給と結びついていません。

そこで、ウェブ上で提供されるプラットフォームを活用し、伐採前の広葉樹から伐採済の丸太、製材済のものまで、様々な形態を公開することで、需要と供給のマッチングを進めたいと考えています。立木の状態で取引が成立すれば、材のトレーサビリティが確保されると共に需要に合わせた造材が可能です。また、事業者にとっても売り先が決まっていれば、安心して伐採搬出に取り組むことができます。さらに、地域産広葉樹が欲しいが販売先が分からないといった購入希望者の悩みも解消され、お互いにメリットのある取組になると考えています。

### ○菌床への活用

神奈川県令和4年度の菌床シイタケ生産量は207 tです。この生産に必要な菌床は、広葉樹のおが粉に米ぬか等の栄養体を混ぜ、シイタケ菌を植菌して製造します。菌床製造を新たに始める生産者から、県産広葉樹のおが粉を入手できないかと相談がありました。

菌床に使うおが粉は、主にコナラ・クヌギです。県央地域で伐採搬出される広葉樹は、ナラ枯れ被害木を含むコナラが一番多いため、この伐倒

木を確保することでおが粉の提供が可能と考えられます。

そこで、チップを所有する林業経営体に協力を仰ぎ、コナラのチップを製造していただき、シイタケ生産者に形状を確認していただきました。近いうちに菌床の試験生産を行う予定です。この取組が実現できれば、細い枝も含めた広葉樹材のカスケード利用が図れるほか、オール神奈川県産の付加価値の高いシイタケ生産が実現でき、地産地消やSDGsにも貢献できます。



シイタケの菌床栽培

## <終わりに>

広葉樹の活用に取り組み始めてから、広葉樹を見る目が変わりました。よく見れば、県内いたるところにケヤキの大径木があり、活用すべき資源は豊富にあります。

フローリングや家具の樹種を調べると、オーク、ウォールナット等の外材ばかりですが、内装や家具用の国産広葉樹材の需要は大きいと思われます。

これからは、里山広葉樹林を伐採して有効活用しながら、広葉樹資源を循環利用することで持続的な森林の保全につながるよう、引き続き工夫改善しながら、支援に取り組んでいきたいと思ひます。

（神奈川県県央地域県政総合センター森林保全課 副技幹 安居院芳子）



認定証を持った「森のせんせい」達

「ここはWiFiも完備されていてワーケーションとしても使用できるんですよ。」

小田原市森林組合佐藤氏が「小田原市いこいの森」内の体験交流センター「きつつき」にある「YURAGI」に案内してくれました。屋外施設も含めたコワーキングスペースとして、令和3年8月にオープンしたそうです。ここに小田原市農政課井上氏、小田原市森林組合佐藤氏、「森のせんせい」堀口氏に集まってもらい「森のせんせい」の取材を行いました。ちなみに、取材ではネット環境は使用せず、紙と鉛筆で行いました。

初めに小田原市農政課井上氏により小田原市の「木育推進事業」の全体像を説明してもらいました。「小田原市では森林環境譲与税を活用して木育推進事業を行っています。この中に三つの事業があります。一つ目は新生児に「森のおくりもの」として木製玩具を配布する事業。二つ目がこれまでに養成した「森のせんせい」を派遣する事業。三つ目が小学生を対象として行う、森林に関する理解を深めることを目的とした「わたしの木づかい事業」です。この事業で「森のせんせい」が活躍しており、①森林教室②校外学習③箸

づくりの3つのプログラムを実施しています。事業を開始した平成28年度の実施校は2校でしたが、各学校の要望にお応えする形で今では15校に増えています。①の森林教室は「森のせんせい」が森林の働きや間伐の必要性に関する授業をします。②の校外学習は小田原市森林組合が中心に実施する森林散策と伐採見学に「森のせんせい」が全面的なサポート及び指導を行います。③は市内で木製品を扱う菌部（そのべ）産業という業者に委託して、子どもたちにオリジナルの箸を作ってもらっており、ここでも「森のせんせい」に安全管理等のサポートしてもらいます。」

「森のせんせい」は今何人いるのですか。」

「令和元年度から令和4年度までに57人を養成・認定しました。養成事業は令和4年度で終了し、現在は派遣とスキルアップ研修を行っています。」



「森のせんせい」養成講座

「どんな方が「森のせんせい」として活動しているのですか。」

「主婦や会社員、学生など、様々な職種かつ幅広い年代の方が活動されています。市内外から応募があり、川崎市や横浜市の方もおります。皆さんに共通しているのは、森や自然、子どもが大好きだということです。」

次に「森のせんせい」堀口氏に話を聞きました。堀口氏は令和元年（1期生）に認定された方で、現在、「森のせんせい」の中心的存在として活動されています。

「普段はお仕事をされているのですか。」

「ええ。会社員をしています。「森のせんせい」の活動は平日に行われることが多いので休暇を取って活動します。」

「仕事と両立は大変だと思いますがどうですか。」

「今は、年間一人平均1～2回の活動回数なのでそれほど負担にはなりません。令和3年までは大変でしたね。森林作業なども全く経験のない人もいたりして、その人たち対象に模擬授業などもやりました。かながわトラストみどり財団の森林づくり事業に参加したり、森林組合の管理する森林で作業をしたりしました。」

小学生への座学は、誰が教えても同じレベルが保たれるように、使用するパワーポイントは皆で作ります。他の人の授業の様子を見学したり、質問も共有するようにしています。」

「子どもたちの反応はどうか。」  
「初めは、ほとんどの子どもが木を伐るのは良くないことだと思っています。森林整備が環境破壊だと思っているようです。そこで、『積極的に木を使うことは森を守ることにつ

ながら』と説明して、森林整備には木を伐ることが必要で、伐った木は有効に利用することが重要だと伝えます。身の回りの木材と触れ合って、校外学習を行い、次第にきちんとし



「森のせんせい」による授業

た理解ができるようになります。」  
「今後の活動について抱負を聞かせてください。」

「小学校の授業が我々のメインの活動なので、それを充実させたいと思っています。子どもたちに興味を持ってもらい、校外学習、箸づくりとうまくつなげるようにしたいと思っています。今年度から市がスキルアップ研修も始めてくれています。57人という人数は活動するのにちょうどいい人数で、自主的な活動ができる体制が生まれています。皆でレベルアップを図っていきたいと思っています。」

最後に小田原市森林組合佐藤氏に「森のせんせい」の話を書きました。「森林組合では②の校外学習を担当しています。森林組合が管理している森林で森林散策をしてから実際に伐採するところを見てもらいます。「森のせんせい」には森林散策を中心にサポートしてもらい、伐採見学の安全配慮などにも協力してもらいます。『積極的に木を使うことは森を守ることに繋がる』を繰り返し伝えて、子どもたちに正しい知識を持ってもらうようにしています。」  
「その他で「森のせんせい」に活動してもらおうことはありますか。」  
「毎年秋に開催している森のイベン

ト「きまつり」に参加してもらっています。「森のせんせい」でブースを出してグッズを販売したり、森林体験ツアー、丸太伐りなどの手伝いをお願いしています。森林組合は職員が少ないので、とても助かっています。」

小田原市森林組合と「森のせんせい」は、まさに車の両輪となって小田原市の木育を盛り上げているようです。

「YURAGI」で3人に取材をした後に、昨年度校舎の内装木質化を行った大窪小学校に向かいました。海に向かって開けた谷戸の中にあり、森に囲まれた小学校でした。

対応してくれたのは5年生担当高橋先生です。

「森のせんせい」の授業は何年生でするのですか」

「大窪小学校では5年生でお願いしています。子どもたちは、森や林業の話は「森のせんせい」から初めて教わります。元々、森に囲まれた環境なので、子どもたちにとって森は身近な存在です。森から流れ出る水で、川も海も豊かになるという話を聞いて、身近な森が勉強とリンクして、いい驚き、新鮮な驚きがあったようです。」

「森のせんせい」に対しての子どもたちの反応はどうですか。」

「大窪小学校には大窪地区にお住まいの「森のせんせい」が来てくれています。子どもたちも地元の方ということで初めから親近感を持てたようで、良く話を聞いてくれました。その方が校外学習にも来てくれて、クロモジの木などの葉の香りやかじった味を教えてくれたりもしました。その日から子どもたちは森の事が大好きになった印象でした。帰ってから子どもたちはしばらくその

話で盛り上がっていました。」

「子どもたちは大窪小学校を木質化した際にも作業に参加したと聞いていますが。」



昇降口 施工前



昇降口 施工後（奥に見えるのが全校児童で作成した木のパネル）

「昇降口にある木のパネルは全校児童が参加して製作しました。夏休み中の作業でしたが、子どもたちは夢中になって作業していました。木を使って製作したことについて、いい思い出になったと思います。」

大窪小学校では校舎の内装木質化と「森のせんせい」が教える森や木材の話とがうまくミックスされて、子どもたちの中に木を使うことは良いことという認識がしっかりと根付いていくと感じました。

小田原市は昔から森と共に生きてきました。箱根寄木細工や小田原漆器を中心に伝統的に木製品の生産が盛んで、多くの製材所や木工所があります。箱根外輪山の山腹には明治の日露戦争戦勝記念で植栽された見事な巨木林があります。子どもたちは「森のせんせい」から森や木材の基礎知識を学び、体験を通じて森の豊かさを感じ、木を有効に使いながら、森と共に生きる昔からの伝統をつないでいく立派な大人になっていくことでしょう。（事務局）

# わが市わが町

# 横須賀市



大楠山山頂からの眺望

横須賀市は神奈川県東部、三浦半島の中央にある人口約 37 万人、面積約 100km<sup>2</sup>の都市です。東京湾の入り口に位置することから、江戸時代には奉行所が置かれるなど国防や交通の重要な拠点とされてきました。明治時代に鎮守府が設置されて以降、軍港都市として栄えてきた歴史があり、現在も海上自衛隊やアメリカ海軍の重要な基地が置かれています。そのため、基地の施設や停泊する護衛艦、軍艦を船上から眺める「軍港めぐり」が人気で、横須賀の主要な観光産業の一つとなっています。

また、旧軍港都市であることから、旧日本軍の遺構も多く残されて

おり、平成 28 年には日本近代化の躍動を体感できるまちとして、呉市、佐世保市、舞鶴市とともに日本遺産に選定されました。本市では現在、猿島や千代ヶ崎をはじめとした要塞・砲台跡の整備を進めており、市内の各地で旧軍港都市の遺構を見学することができます。

本市は旧軍港の近代遺産以外にも、豊かな自然が観光資源の一つとなっています。横須賀市の大部分は起伏の大きな丘陵地帯や山地帯で形成されていることから山も多く、大楠山や武山といった市内の主要な山ではハイキングを楽しむことができます。特に大楠山は、天候次第で山頂から富士山や伊豆大島などを望む

ことができ、その眺望は小説家の司馬遼太郎が「三浦半島記」にて「山頂からの眺望は、日本国のどの名山よりもすぐれている」と評すほどです。

このように本市は森林も多く、森林面積は市内の 30% 近くを占めています。森林の大部分は常緑広葉樹や夏緑広葉樹からなる二次林により構成されており、スギ林などの人工林は森林面積のわずか 2% 程度に過ぎません。現在林業は行われていないものの、森林はかつて里山として利用されてきた経緯があり、開発が進んだ現在でもわずかながら里山の環境が残されています。このわずかな里山環境を保全するため、本市では民間企業や NPO 法人などと連携した保全活動を行っています。いまではトウキョウサンショウウオやサシバといった希少種をはじめ、多くの生き物が確認されており、活動の効果が表れてきています。



横須賀の里山に飛来するサシバ

一方で保全活動がなされていない樹林地では荒廃が進んでいることが課題となっていることから、現在課題解決にむけた樹林地のあり方や管理方法を模索しています。今後は荒廃した森林の整備にも尽力していき、防災や健康増進、生物多様性など森林の持つ多面的な機能が活かされた豊かな森林を創り上げていくことを目指します。(横須賀市自然環境・河川課 森塚晶人)



横須賀ヴェルニー公園から護衛艦を臨む

# 森林づくり活動グループの広場

## はるひ野里山学校

～川崎市黒川谷ツ公園の里山を保全する～



東側から西方面を臨む 写真右上には西側の雑木林が見える

私たち、はるひ野里山学校管理運営協議会（以下はるひ野里山学校）が活動している黒川谷ツ公園は、川崎市麻生区の小田急線多摩線、はるひ野駅を降りたすぐそばにあります。



黒川谷ツ公園の上空写真

出典：国土地理院ウェブサイト

両側を小田急線と京王相模原線に挟まれた谷津の地形をしており、その中、里山を構成する要素の雑木林や田んぼ、小川、草地、湿地がすべて備わっている自然豊かな面積約3.2 haの広さの公園です。

当公園は、県内でも珍しい閉鎖型公園という管理方法で2007年（平成19年）に開園しました。川崎市麻生区と地域住民で作成したマスタープランを基に、開園日を制限することで人からの影響をなるべく抑

えて希少な生物種を保護するという理念のもとで運営されています。2023年度は月に約3～4回（年間43日）の公園開放日が設けられました。

そのような特徴ある公園で、はるひ野里山学校は、公園開放日に管理者として保全活動しています。

2005年に私たち、はるひ野里山学校は「緑の活動団体」として公園の整備や保全をするボランティア活動を開始しました。当初は田んぼや雑木林の整備方法についてわからなかったため、開園準備の際のワーク

ショップで知り合った地元の方々に、田んぼの田起こしや雑木林整備の仕方などアドバイスをいただき、里山保全について勉強してきました。

一年間の保全作業・管理は、多様な環境がある公園ゆえ、その内容も多岐にわたりますが、大きく雑木林と水辺の2つのゾーンに分けられます。

落葉広葉樹のクヌギやコナラ、常緑広葉樹のシラカシが主体の当公園の雑木林では、木々が高木化しています。また、シラカシの過密も問題



黒川谷ツ公園の中央に位置する5枚の田んぼのうち一番広い水辺のある田んぼ



倒木リスクのある木を伐採



剪定をした枝の分解処理にハンディーチェーンソーが大活躍しています。そのため、木々の繁茂で森が暗くならないように努めています。それには自分たちでチェーンソーを使いシラカシなどの間伐・枝打ちを行っています。近年他地域でも問題になっているナラ枯れ被害により、倒木や落下枝のリスクがとて高まってきたので、なによりも安全第一で作業することを心がけています。

水路、湿地、田んぼの水辺にはド

ジョウの仲間や水生昆虫などの生き物がいます。これらを守る取り組みとして、ヨシ刈りやヨシ根切り、草刈り、田起こしなどをします。また、アメリカザリガニの駆除も行っています。アメリカザリガニ駆除については開園当初から継続して駆除してきた甲斐もあり、トンボやゲンゴロウ類などをはじめ、多種多様な水生生物が戻ってきました。

水辺管理でもう一つ大切な保全作業があります。それは、水域への落葉の供給源となる木の枝を剪定することです。雑木林同様に、水辺周りも木々の繁茂のため水辺が暗く、落ち葉が堆積してきました。良好な水辺環境を維持するためにも定期的な枝打ちは必要な作業と考えています。長年の落ち葉による堆積泥が水田にありましたが、昨年秋に、開園以降初めて田んぼの泥上げ作業を実施し、それらの一部を除去しました。そのほか、公園内の草地でのセイタカアワダチソウやヤセウツボなどの外来植物駆除にも取り組んでいます。また、希少な生物種に対するモニタリング調査や保護、記録を残すことも、私たちが大切にしています。更に、これらの蓄積されたデータは会員間で情報共有化に努め



里山散策デー



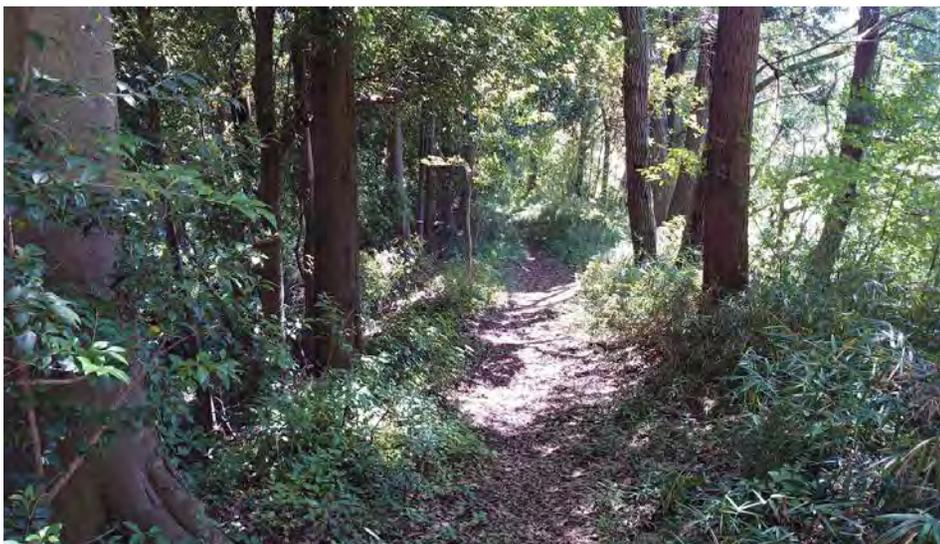
小学校課外授業サポート

ています。

社会貢献への取り組みとして、春のイベント「里山散策デー」(年1回)、地域の小学校へのサポート(公園での課外活動)なども行っています。

2017年、川崎市とはるひ野里山学校は「黒川谷ツ公園の管理運営に関する協定」を結び、2018年には「園内案内等業務」を追加契約しました。会発足から15年後の2020年には「川崎市環境功労者」として川崎市から表彰されました。そして来年2025年4月には、創立20周年の節目を迎えます。会立ち上げ当初6名だった会員数も、現在は33名となりました。黒川谷ツ公園の貴重な自然環境をこれからもずっと守り続け、次世代へ継承していきたい思いで、みんなで楽しく活動していきたいと思っています。

(はるひ野里山学校管理運営協議会代表 小峯 聡)



東の林

# 事務局便り INFOMATION

## 1 令和5年度森林ウォークを開催しました

令和5年11月26日(日)、南足柄市内の県立21世紀に森で今年度の森林ウォークを開催しました。当日は朝方の冷え込みが厳しく、小雨。それでも43名の方が参加くださいました。ウォーキングは、「かながわ森林インストラクター」の5名の講師が、参加者の五感に訴えるすばらしい解説のもと、ゆっくりと県営内山林道を歩きました。



紅葉の内山林道を歩く

## 2 かながわ市町村林政サポートセンターによる研修会の開催

### (1) 花粉症対策技術視察研修会

令和5年12月14日、神奈川県自然環境保全センター研究連携課の齋藤央嗣氏を講師に迎え、神奈川県の行う花粉症対策技術について研修会が開催されました。参加者は31名。研修は、自然環境保全センターで齋藤講師から花粉症対策技術の講義を受け、センター内の無花粉スギの母樹、採穂園などを見学、次に南足柄市広町の苗木生産者である町田憲司氏の花粉症対策苗木生産現場を視察、最後に県立21世紀の森内に移動して無花粉苗木の植栽現場、成長の様子を視察しました。無花粉、少花粉のスギ・ヒノキ苗木生産の技術について、初めて聞く

人が多く、講師の丁寧な説明を、皆、熱心に聞き入っていました。



町田憲司氏と齋藤央嗣氏による野外育苗施設の説明

### (2) QGIS 研修会

令和6年1月18日、神奈川工科大学ITエクステンションセンターで、朝日航洋㈱の和田陽一氏をお招きしてQGIS研修を開催しました。参加者は27名。研修は、GISの概要の説明から始まり、実際にフリーソフトであるQGISを用いて地図データの加工、図面の作成を行いました。講義では、国土地理院タイルを使用し、能登半島地震の山地災害状況など最新の情報に触れながら進められました。QGISは非常に汎用性のあるソフトで、静岡県などで先行している森林計画関係のオープンデータが整備されると、法務省登記データとともに、森林整備の実施や災害などの対応の際、効率的かつ迅速な対応が可能となることを学びました。ただし、インターネット環境に強く依存をしていることから、こうしたデータの利用を、各団体内でルール化しておくことがキーポイントであることも、今後のGIS利用を進める上で重要であることを共有しました。



GISを導入するメリットを聴く

### (3) 里山管理研修

令和6年2月9日、横浜情報文化センターにおいて、「かながわの里山再生にむけて」と題し、里山管理研修を開催しました。この研修会は、市町村取組事例発表会と森林づくり支援団体講習会を兼ね、総勢128名の参加者を得、講師には、里山林の管理や広葉樹材の利用について、最前線でご活躍されている4名の方に講演していただきました。基調講演には、神戸市副市長・神戸大学名誉教授の黒田慶子氏に「里山の現状と今後の管理について」と題してお話をいただきました。グローバルな視点とともに、日本の森林に関する誤解から生じる様々な里山の課題について、森への感度を上げることと既存概念にとらわれず科学的知見によるアプローチの大切さが説かれ、また、里山の資源活用を通じた循環型社会実現の必要性についてお話をいただきました。大磯町産業観光課の弘重穰（ゆたか）氏と「里山をきれいにする会すもあ（薪屋大磯）」の坂本桂太郎氏には、それぞれ「兼業・副業型の小さい林業で里山を活用」、「新たな担い手による里山整備」と題し、大磯町で実践する週末林業といった里山整備の新たな形について、その仕組みづくりや人材育成等について講演をいただきました。最後に里山整備の出口である広葉樹資源の活用について堀内ウッドクラフト代表の堀内良一氏に「かながわの木で木製品を作る」と題し、広葉樹材活用の具体的な実例や県内流通の課題についてお話をいただきました。いずれの講演も、里山が置かれている現状に受け身とならず、新たに切り拓いていこうとする講師ら関係者の力強さがあふれており、参加者の皆さんも、今日的な里山の在り様について何かしらのヒントを得たようでした。



大磯町における里山活用の新たな試みを語る講師

### 3 表紙写真解説

小田原市では、地域産材の利用拡大を目的に平成30年度から「学校木の空間づくり事業」に取り組み、小田原市立大窪小学校の木質化は市内で5校目となります。

小学校の木質化は、先生や保護者、地域の方々との協議を経て、人の目に触れる機会の多い部分を中心に行っています。また、節の多い材や虫害材もパテ材で補修することで、合板やチップとなる木材も板材として積極的に活用し、木の持つ多様な表情を学べるようにしています。

表紙写真の図書スペースは、本棚と柱、小あがり部分をメインに木質化し、机と椅子を製作。カーペットの劣化が進んでいた小あがりには、ヒノキで改修。木質化された存在感のある柱にもたれかかり、読書を楽しむ子どもたちの居場所となっています。



読書を楽しむ子どもたち



広報誌 緑の斜面 VOL 82

／ 令和6年3月31日発行

HOME PAGE  
<https://k-cr.com/>

編集・発行 神奈川県森林協会  
住所 厚木市中町2丁目13番14号  
サンシャインビル604  
電話・FAX 046-240-0500